

まえがき

幼児は抽象的思考が確立されていないので、座って頭で考える活動よりも、おのずと、作ったり、遊んだりなどの身体を使った活動が主となる。子どものときの経験や学びが、その後の基盤をつくることに異論がある人はいない。

このことから、保育者には、豊かな生活を創りながら、いかに子どもの学びを深められるかが問われる。

子どもは大人が指示すると、指示されたとおりに活動する怖さがある。子どもは保育者を選べなければ、活動内容も選べない。保育者が用意した活動を、受け入れるしかない。子どもの発達の鍵は、保育者しだいであることを自覚してもし過ぎることはない。

スムーズに活動が展開されているからといって、保育者は安心してはいけない。問われるべきは、活動の質である。子どもが保育者に指示された活動をして、無難な時間を過ごせばよいのではない。保育者と子どもが、共同で高みに登っていく活動でなければならない。そのためには、造形活動の本質的な意味、徹底的な教材研究・解釈、高みに登るための支援などを探究し続けなければならない。

書店で幼児コーナーを見ると、作品づくりに関わるハウツー本であふれている。造形活動は制作（作品づくり）を通して展開される以上、子どもが学びを深めるための題材（作品づくり）を考えなければならない。保育者が個人で考えるには限界があるので、図書などを参考にするのは当然であり、参考にしなければならない。

作品を作ることが目的なら、ハウツー本に書かれている作り方を参考にすれば済む。しかし、作品づくりは手段であって、目的ではない。目的は、作品づくりを通して何を学ぶかである。ハウツー本には、作り方の詳細は書かれていても、学びを深めるための根拠や構想まで書かれているものは少ない。保育者には、吟味した題材を通して、子どもが学びを深めるための構想が求められ

る。学びを深めるための構想なくして、保育は成立しない。

また、「どんな題材をどのように支援すればよいのか」とどまるのではなく、題材や支援に対する教育方法的な根拠を持たなければならない。教授学である。理論と言ってもよい。保育の現場は、この「教授学」に課題があると思っている。

そこで、本書の前半は実践編として「発達を踏まえた描画材料や題材」及び「造形活動の環境と記録」を紹介し、後半は理論編として「造形活動の本質的な意味」を明らかにした。

本書が日常の造形活動を見直し、子どもが学びを深めるための「造形活動の本質的な意味」「徹底的な教材研究・解釈」「高みに登るための支援」を考える一助になれば幸いである。

2016年12月

成田 孝

心おどる造形活動

— 幼稚園・保育園の保育者に求められるもの —

目 次

まえがき	i
------	---

第1章 発達を見通した造形活動の「描画材料」と「題材」を考えよう	1
----------------------------------	---

- | | |
|--------------------|----|
| 1 描画材料を考えよう | 2 |
| (1) 1歳頃～3歳頃向きの描画材料 | 2 |
| (2) 3歳頃以上向きの描画材料 | 7 |
| (3) 紙類 | 10 |
| 2 学びを育む題材を考えよう | 12 |
| (1) 感覚（感触）遊び | 13 |
| (2) 版画 | 28 |
| (3) 粘土 | 40 |
| (4) 工作 | 51 |
| (5) 共同制作 | 58 |
| (6) 絵の具による彩色 | 65 |

第2章 造形活動の「環境」と「記録」を考えよう	69
-------------------------	----

- | | |
|------------------------|----|
| 1 造形活動の環境を考えよう | 71 |
| (1) 材料を集めよう | 71 |
| (2) 道具類の保管例 | 74 |
| (3) 作品の保管例 | 75 |
| (4) 活動場所 | 77 |
| (5) 材料や道具類の正しい使い方を教えよう | 78 |
| (6) 材料や道具類を使いやすい場所に置こう | 80 |
| (7) 掃除用具を考えよう | 80 |
| (8) 残った材料の活用を考えよう | 81 |
| (9) 壁面を豊かにしよう | 82 |
| 2 記録をとって、生かそう | 83 |
| (1) 活動の記録を文章と写真で丁寧にとろう | 83 |

- (2) 活動の様子を保護者に伝えよう 85
- (3) パソコンを活用しよう 86

第3章 子どもにとっての「造形活動の意味」を考えよう …………… 95

- 1 造形活動の本質を考えよう 95
 - (1) 保育者が学ぶ意味を考えよう 95
 - (2) 造形活動は、対象に直接働きかける 99
 - (3) 情操は「引き上げる」ものではなく、「育む」ものである 101
 - (4) 「作品づくり」から脱却しよう 102
 - (5) 「五感」を克服し、「体性感覚」を重視しよう 104
- 2 活動内容を吟味しよう 111
 - (1) 徹底的に教材研究・解釈しよう 111
 - (2) 教材研究・解釈を基に、活動の構想を具体的に練り上げよう 113
- 3 「子ども主体」の意味を考えよう 116
 - (1) 「やらされる活動」ではなく、「する活動」を重視しよう 116
 - (2) 保育者が「教えたこと」を、子どもが「学びたいこと」に転化する
118
 - (3) 自己決定の場面を多くしよう 120
 - (4) 試行錯誤を保証しよう 121
- 4 子どもを理解しよう 125
 - (1) 保育者は、自分の子ども時代のことをとっくに忘れている 125
 - (2) 先入観・固定観念を捨てよう 125
 - (3) 発達を概観する 127
 - (4) 障がい児への対応を考えよう 134
- 5 「豊かな生活」を創り、「豊かな表現」につなげよう 142
 - (1) 「豊かな生活」とは何か 142
 - (2) 「豊かな生活」を、「豊かな造形表現」につなげよう 158
- 6 子どもに信頼される保育者になろう 170
 - (1) 保育者に求められる姿勢はどうあればよいのだろうか 170

(2) 保育者が子どもから学ぶ意味を考えよう	176
(3) 子どもと大人は、世界観・価値観が異なる	177
7 「成就感」の意味を考えよう	178
(1) 「成就感」は、伝えずにはいられない体験から生まれる	178
(2) 「自由制作」一辺倒では、成就感が育たない	182
(3) 「発達の最近接領域」が重要である	184
8 保育者と子どもが共同で学びを創ろう	186
(1) 子どもが「成就感」を得られる活動を考えよう	186
(2) 子どもの発見・発想・提案・意見・アイデアを生かそう	188
(3) 集団の教育力に注目しよう	196
(4) 子どもと対話しよう	199
(5) 共感的な「1対1の対話による描画活動」を重視しよう	201
9 気になる表現に配慮しよう	206
10 保育指導案を考えよう	208
(1) 保育指導案を書く意味	208
(2) 構造的・全体的に保育指導案を構想しよう	209
(3) 保育指導案作成上の具体的な留意点	209
注及び文献	218
あとがき	225